

『スペイン語記述文法』におけるConsecutio Temporumの扱いについて

山村, ひろみ
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5496>

出版情報：言語文化論究. 16, pp.231-262, 2002-07-12. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

解説：『スペイン語記述文法』における Consecutio Temporumの扱いについて

山 村 ひろみ

0. はじめに

本稿は1999年に発行された『スペイン語記述文法』の第47章“El tiempo verbal y la sintaxis oracional. La consecutio temporum”の内容を概説すると同時に、その特徴、問題点をまとめたものである¹⁾。

同章の執筆者であるÁngeles Carrasco Gutiérrezは、1998年に*La correlación de tiempos en español*という論文によりUniversidad Complutense de Madridから博士号を取得し、現在はUniversidad de Castilla-La Manchaで教鞭を取っている新進気鋭の研究者である。同章が対象とするスペイン語のconsecutio temporumについては、前述の博士論文のほかCarrasco Gutiérrez (1994a, 1994b), Carrasco Gutiérrez y García Fernández (1994, 1996)等の論文があり、そのそれぞれで従来見られなかった詳細で鋭い考察を加えている。従って、今回『スペイン語記述文法』の中のconsecutio temporumの章を彼女が担当したのは、誠に正鵠を射た人選といえよう。

以下では、まず、第1節で同章の構成を概観し、第2節で同章の内容を各節ごとに見ていく。そして、最後の第3節で同章の分析に対する管見を述べてみたい。

1. 構成

まず、『スペイン語記述文法』第47章全体の構成を見ておこう。同章の最初に置かれた目次に従うならば、それは次のとおりである。

1) 本稿は山村(2002)に引き続き1999年に発行された『スペイン語記述文法』を紹介するという関西スペイン語学研究会のプロジェクトの一部をなすものである。『スペイン語記述文法』(*Gramática descriptiva de la lengua española*, Ignacio Bosque, Violeta Demonte編, Real Academia Española, Colección Nebrija y Bello, 全3巻, Espasa Calpe, Madrid)は1999年、現代スペイン語学界の重鎮であるIgnacio Bosque, Violeta Demonte両博士を中心に気鋭のスペイン語学研究者73名によって執筆された本格的な現代スペイン語の記述文法書である。全体は78章からなり、それぞれ第1巻「品詞の基本的統語論 (Sintaxis básica de las clases de palabras)」, 第2巻「基礎的統語構造／時制, アスペクトおよび法関係 (Las construcciones sintácticas fundamentales/Relaciones temporales, aspectuales y modales)」, 第3巻「文と談話の間／形態論 (Entre la oración y el discurso/La morfología)」の3巻に分かれて掲載されている。なお、本稿が扱う第47章は第2巻の3061ページから3128ページに掲載されたものである。

47.1. Consideraciones generales: definición de *consecutio temporum***47.2. Oraciones subordinadas sustantivas**

47.2.1. Casos canónicos de concordancia de tiempos

47.2.1.1. Relación de anterioridad

47.2.1.2. Relación de posterioridad

47.2.1.3. Tiempo, aspecto y relación de simultaneidad

47.2.1.4. Resumen

47.2.2. Restricciones impuestas por las propiedades léxicas del verbo principal

47.2.3. Casos no canónicos de concordancia de tiempos

47.2.3.1. Interpretación de doble acceso

47.2.3.2. Tiempo de evaluación implícito

47.2.3.3. Concordancia formal y concordancia de sentido

47.3. Correlación temporal y subordinación sintáctica**47.4 Concordancia temporal y orden entre oraciones****47.5. Oraciones subordinadas no sustantivas**

47.5.1. Oraciones subordinadas relativas y causales

47.5.1.1. Subordinación a un futuro

47.5.1.2. Determinación indirecta del tiempo de evaluación

47.5.2. Las oraciones subordinadas temporales

Referencias bibliográficas

次節では、この構成に従って各節の主な内容を見ていくことにより、執筆者である Carrasco Gutiérrez のスペイン語における *consecutio temporum* の解釈をまとめていく。

2. 概説

2.1. 第47章第1節：*consecutio temporum* の定義²⁾

本節で執筆者 Carrasco Gutiérrez は、まず、『スペイン語記述文法』第47章のテーマである *consecutio temporum* の定義、すなわち、*consecutio temporum* とはいったい何であるかということを明示する。それは次のとおりである。

“Dicho fenómeno alude a la relación de dependencia que se establece entre las interpretaciones temporales de dos formas verbales si entre sus respectivas oraciones existe asimismo una relación de dependencia o subordinación sintáctica.” (p.3063)

“la correlación de tiempos es un fenómeno de dependencia entre las interpretaciones de dos o más formas verbales estrechamente vinculado a la relación de subordinación sintáctica que necesariamente ha de existir entre las oraciones en que aparecen.”

2) Cf. pp.3063-3066.

(p.3065)

上の記述によれば, *consecutio temporum*, すなわち, *correlación de tiempos* は, 単に複数の動詞形式の間に確認される時間解釈の依存関係というのではなく, 当該動詞形式が出現する統語的環境, 特に, その従属関係に強く結びついたものということになるが, *consecutio temporum* をこのように定義する根拠として Carrasco Gutiérrez は次の3つの事実をあげている³⁾。

- ①当該動詞形式は独立文に出現するときと従属文に出現するときとで異なる解釈を受けうる。
- ②独立文に出現することのできる動詞形式のすべてが必ずしも従属文に出現できるわけではない。
- ③ある動詞形式の他の動詞形式に対する解釈の依存度は従属の仕方によって異なる。

以下, これら3つの事実を具体的に検討してみよう。まず, ①については, 次の(1)を参照されたい⁴⁾。

(1) a. María visitó El Prado el lunes.

b. Juan pensará el martes que María visitó El Prado el lunes.

(1a)(1b) ではともに *visitó* すなわち *pretérito perfecto simple* (以下, *p.s.* と略記) が出現しているが, その解釈は互いに異なる。独立文に出現した(1a)の *visitó* が発話時を基準としながら, それより以前に生起した事態を示しているのに対し, 従属文中に出現した(1b)のそれは, 主動詞 *pensará* が示す発話時以後の時を基準としながら, それより以前に生起した事態を示しているが, この事態の生起時自体は発話時より後である可能性があるからである。

②に関しては, (2)の例が参考になる。

(2) a. María está embarazada.

b. ??Juan pensó que María está embarazada.

(2a)(2b) では同じ *está* すなわち *presente* (以下, *pres.* と略記) が出現しているが, その容認度には違いが見られる。独立文に出現した *pres.* には何の問題もないが, *pensó* のように想像世界の内容を表わす動詞に従属した *pres.* は容認度が低い。このことは独立文に出現することのできる動詞形式が必ずしも従属文に出現できるわけではないことを明示するものである。

3) Cf. pp.3065-3066.

4) 以下, 例文は断わりがない限り, Carrasco Gutiérrez の論文中にある例文をそのまま使用する。ただし, その番号は本稿の順序に従うものとする。なお, 問題となる動詞形式には下線が施されている。

最後の③については、次の名詞的従属文に出現する動詞形式と関係文に出現する動詞形式との解釈上の違いを参照されたい。

- (3) a. #Juan {dijo/pensó} el lunes que María visitó El Prado el martes.
 b. Juan conoció el lunes a la chica que os visitó el martes.

(3a)(3b)ともに従属文中にvisitóというp.s.が出現しているが、その主文事態に対する時間関係はそれぞれ異なっている。名詞的従属文に出現した(3a)のp.s.は主文事態の生起時および発話時よりも前に生起した事態を示しているが、関係文中に出現した(3b)のp.s.は発話時よりも前だが主動詞事態よりも後に生起した事態を示しているからである。

以上、執筆者Carrasco Gutiérrezのconsecutio temporumの定義およびその定義の妥当性を示すと執筆者が考える言語事実を見た。

2.2. 第47章第2節：名詞的従属文⁵⁾

この節ではまず、時制の一致⁶⁾の標準的ケース(casos canónicos)が扱われ、その後、非標準的ケース(casos no canónicos)の解説が続く。以下、本稿でもこの順に従ってそれぞれのケースを見ていく。

2.2.1. 時制の一致の標準的ケース

Carrasco Gutiérrezは、時制の一致の標準的ケースとして、まず、名詞的従属文中の動詞形式が当該従属文事態の時(tiempo)を主文事態が生起する時に関連づけて時間軸上に定位する場合をあげ⁷⁾、それを以下に見るように、従属文事態が主文事態に対して示す時間関係ごとに解説している。

2.2.1.1. 前時関係⁸⁾

Carrasco Gutiérrezによれば、「主文の時制が現在領域(esfera del presente)⁹⁾に属す場合、従属文において前時性(anterioridad)を表わすのは直説法のp.s.、直説法および接続法のpretérito perfecto compuesto(以下、p.c.と略記)とpretérito imperfecto(以下、imp.と略記)である。一方、主文の時制が過去領域に属す場合、あるいは、p.c.の場合¹⁰⁾、従属文において前時性を表わすのは直説法あるいは接続法のpluscuamperfecto(以下、plusc.と略記)である。」¹¹⁾という。また、彼女は、「(従属動詞が[解説者補足])pres.に従

5) Cf. pp.3066-3097.

6) 以後、consecutio temporum, correlación de tiempos, concordancia de tiemposは慣習に従い「時制の一致」と訳す。

7) Cf. p.3066.

8) Cf. pp.3066-3069.

9) 「現在領域(esfera del presente)」とは時間軸上の発話時を含む部分をいい、「過去領域(esfera del pasado)」とは発話時に先行しそれを含まない時間軸上の部分をいう。cf. p.3067.

10) この記述からも分かるように、Carrasco Gutiérrezは、時制の一致という現象に関する限り、主文に出現するp.c.は過去領域の時制と同様の扱いを受けると考えている。cf. p.3069.

11) Cf. p.3066.

属した場合、時制の一致は目に見える効果を持たない (no tiene efectos visibles)。なぜなら, pres.は主文の時を発話時と一致させるからである。』¹²⁾とも述べている。

しかし, 従属動詞のfuturo (以下, fut.と略記) に対する従属は前記の場合とは異なり, 注意が必要である。Carrasco Gutiérrezによれば「fut.への従属は事情が異なる。(中略) fut.への従属は結果として, 従属動詞の発話時への直示的言及 (referencia deíctica al momento de la enunciación) を失わせる。』¹³⁾とあるからである。このことは先に見た例文 (1b), また, 以下の (4) に明らかであろう。

(4) María sabrá el jueves qué nota obtuvo el día anterior.

独立文中のp.s.は常に発話時より以前の事態に言及する。ところが, この (4) のp.s.であるobtuvoはfut.に従属しているため, 発話時より以後の事態を示すことが可能なのである。この点について, 執筆者であるCarrasco Gutiérrezは「(中略) 主文の時制がfut.のとき従属文事態と発話時の間の前時的関係は可能性のひとつに過ぎない。それ自体発話時に後続する事態に先行する事態 (un evento que es anterior a otro que sigue a su vez al momento del habla) は発話時に先行することができるが, それと同時にまたそれより後のことも可能である。』¹⁴⁾と記している。

2.2.1.2. 後時関係¹⁵⁾

従属文事態が主文事態に対して後時関係を示す場合は次のとおりである。「主動詞の時制が現在領域の場合, 後時性は直説法のfut.および接続法のpres.で表わされる。主動詞の時制が過去領域あるいはp.c.の場合, 後時性はcondicional (以下, cond.と略記) あるいは接続法のimp.で表わされる。』¹⁶⁾

2.2.1.3. 時制, アスペクトと同時関係¹⁷⁾

さて, 従属文事態と主文事態の同時関係については, 取りあえず「一般に同時性を表わすのは直説法および接続法のpres.とimp.である。前者は主動詞が現在領域の場合に使用され, 後者は主動詞が過去領域あるいはp.c.の場合に使用される。同様の関係は推量 (conjetura) や可能性 (probabilidad) のような法的価値を持ったfut.やcond.によっても示される。つまり, これらの時制形式はそれぞれpres., imp.と同じ指示をするのである。』¹⁸⁾と記述されているのであるが, この後, かなりの紙幅を割いてスペイン語における時制とアスペクトの違い, 各動詞形式が持つアスペクト価値についての解説が続く。このように主文事態と従属文事態の同時関係に言及する本項で時制とアスペクトの違いが詳細に説明されるのは,

12) Cf. p.3067.

13) Cf. p.3067.

14) Cf. p.3068.

15) Cf. pp.3069-3070.

16) Cf. p.3069.

17) Cf. pp.3071-3081

18) Cf. p.3071.

偏にCarrasco Gutiérrez特有の「直説法のp.s.とimp.はどちらも発話時に対して前時性を示す過去領域の絶対時制 (tiempos absolutos) である」という考え方に起因するものと思われる¹⁹⁾。というのも、Carrasco Gutiérrezのようにp.s.とimp.の時制機能の間には何の違いもないと考えるならば、時制の一致という現象において両形式が見せる時間関係の相違は、時制以外の範疇（ここではCarrasco Gutiérrezのいうアスペクト範疇）によって説明するしかないからである。以下では、この点を踏まえながら、主文事態と従属文事態との同時関係がなぜimp.によって表出され、なぜp.s.では表出されないのかという問いに対する執筆者Carrasco Gutiérrezの見解を見ていく。

Carrasco Gutiérrezは、p.s., imp.がともに発話時に対して前時性を示す過去領域の絶対時制でありながら、過去領域にある主動詞と同時関係を示すことができるのがimp.だけでありp.s.にそれができないのは両形式のアスペクトの違いに因る、と主張する²⁰⁾。ここでいうアスペクト (aspecto) とは「時制が示す当該事態の部分的な時と当該事態全体の時との関係についての情報を提供する」ものであり、Perfecto, Prospectivo, Perfectivo (Aorístico), Imperfectivoの4種類からなる²¹⁾。このうち主文事態との同時関係を示すことができるimp.はImperfectivoアスペクト²²⁾を有し、それができないp.s.はPerfectivoアスペクトを有す。従って、Carrasco Gutiérrezによれば、imp.によって表出された従属文事態が過去の主文事態に対して同時関係を示すのは、それがImperfectivoアスペクトを持つからであり、一方、p.s.によって表出された従属文事態が同様の同時関係を示すことができないのは、それがPerfectivoアスペクトを持つからだということになる。しかし、それでは、どうしてImperfectivoアスペクトは同時関係を示すことができ、Perfectivoアスペクトにはそれができないのか。このことについてCarrasco Gutiérrezは次のように述べている。

imp.に代表されるImperfectivoは事態を限定的に捉えることを認めない。このことからImperfectivoによって表わされた事態は時間軸上の何か「開いた (abierto/no acotado)」ものとして認識される²³⁾。一方、p.s.に代表されるPerfectivoは、逆に、事態の終点 (fin) を示すことから、それによって表わされた事態は時間軸上において「閉じた (cerrado/acotado)」ものとして捉えられる²⁴⁾。このことを踏まえて、以下の例文を参照されたい。

(5) #María dijo que Juan planeó un viaje a Cuba.

Perfectivoを示すp.s.によって表出された(5)の従属文事態は主文事態に対して前時的関係を示すことはできても、同時的關係を示すことはできない²⁵⁾。Carrasco Gutiérrezによ

19) Cf. p.3067.

20) Cf.p.3072.

21) Carrasco Gutiérrezによれば、Perfectoアスペクトは複合完了形、Prospectivoアスペクトはir a +inf., Perfectivoアスペクトはp.s.と複合完了形、Imperfectivoアスペクトはpres.とimp.によって示されるという。また、fut., cond.はImperfectivoアスペクトとPerfectivoアスペクトの両方の解釈を示すことができるとも述べている。cf.pp3073-3074.

22) 以下、「Imperfectivoアスペクト」はImperfectivo、「Perfectivoアスペクト」はPerfectivoと略記する。

23) Cf.p.3073.

24) Cf.p.3076.

25) Cf.p.3078.

れば、その理由は当該事態の終点を表示する Perfectivo は必然的に当該事態の成立から非成立への移行 (transición) を仮定するからである。すなわち、(5) の従属文事態が主文事態に対する同時関係を示さないのは、その p.s. による表出によって主文事態の成立時における当該事態の無効という解釈が生まれるからなのである。一方、(6) のように Imperfectivo な imp. によって表出された従属文事態は主文事態に対して同時的關係を示すことができる。

(6) María dijo que Juan planeaba un viaje a Cuba.

Carrasco Gutiérrezによれば、(6) の従属文事態が主文事態に対して同時關係を示すことができるのは、その表出形式である imp. が当該事態の限界 (= 終点) を表示することのない Imperfectivo であることに因る。つまり、(6) の従属文事態が主文事態と同時關係にあると解釈されるのは、そこでは上述の (5) のように、主文事態の成立と同時に従属文事態の無効性が仮定されるといったことが起こらないからなのである。

以上、Carrasco Gutiérrezの主張する時制の一致における同時關係の表示とアスペクトとの関係について簡単に見てきたが、実は、ここで触れられた「アスペクト」範疇のスペイン語への導入についてはいまだ研究者の間で賛否両論があるのが現状である²⁶⁾。また、彼女が「アスペクト」を持ち出す原因となった imp. と p.s. の時制機能の同一性についても、意見を異にする研究は少なくない²⁷⁾。こうしたことを考慮するならば、本項で見た解釈は、Carrasco Gutiérrezの見解の特殊性を強く反映したものといえることができる。

2.2.1.4. 主動詞の語彙特徴による制約²⁸⁾

さて、2.2.1.1から2.2.1.3.では、名詞的従属文における時制の一致の標準的ケースを見たが、Carrasco Gutiérrezによれば、そこで確認された主文事態と従属文事態の時間關係は主動詞の語彙特徴によって制約を受けることがあるという。次例を参照されたい。

(7) *Le recomendaron que hubiese estudiado la lección.

(8) #Vi que habían pasado.

(9) El reo confesó que {#se escaparía/#se escapaba/se iba a escapar}.

(7) が非文となっているのは、主動詞 recomendar が、従属文事態が主文事態に対して後時的關係にあることを要求する動詞群のひとつであることに因る。つまり、recomendar のように、従属文事態が必ず主文事態よりも後に生起することを意味する語彙特徴を持つ動詞が主動詞になると、その従属文には後時性を示す fut., cond., 接続法 pres. あるいは接続法

26) スペイン語の動詞体系にアスペクト範疇の導入を認めない代表的な立場として Rojo (1974) がある。この Rojo の主張については山村 (2002) を参照されたい。

27) Carrasco Gutiérrezの「直説法の p.s. と imp. はどちらも発話時に対して前時性を示す過去領域の絶対時制 (tiempos absolutos) である」という主張の中でも特異なのは imp. を絶対時制と見なしている点である。というのも、p.s. と imp. は同じ過去領域の事態を表わすという意見であっても、前者は発話時基準の絶対時制、後者は非発話時基準の相対時制とするのが、スペイン語学の伝統的見解だからである。

28) Cf. pp.3083-3087.

のimp.しか出現することができないのである。

同様のことは(8)についてもいえ、この文は主動詞verがどう解釈されるかによって文法性が異なってくる。すなわち、verが「見る」という知覚動詞として解釈された場合は非文となるが、「理解する」「分かる」といった理解・判断を表わす動詞として解釈された場合には文法的となるのである。そして、verが「見る」という知覚動詞として解釈されたときそれが非文になるのは、「知覚」という語彙特徴を持つ動詞が主動詞になると、その従属文には同時性を示すpres.かimp.しか出現できないという制約に囚るとされる。

(9)は、従属文事態が主文事態よりも後に生起することを認めない動詞が主動詞になった場合である。Carrasco Gutiérrezによれば、(9)の従属文でir a + inf.のimp.による表出のみが文法的となっているのは、それが不定詞の示す事態(escapar)に先んずる状態が主文事態と同時関係にあることを示しているからであり、他方、cond.やimp.による表出が非文となるのは、それらが従属文事態の主文事態に対する後時性を明示するからだという²⁹⁾。

以上、名詞的従属文における時制の一致の標準的ケースを見てきた。次に、同環境における時制の一致の非標準的ケースを見る。

2.2.2. 時制の一致の非標準的ケース：ダブルアクセス³⁰⁾

Carrasco Gutiérrezが名詞的従属文における時制の一致の非標準的ケースと見なすのは、以下のように、主動詞が過去領域の時制形式を取っているにも拘わらず、従属文事態が現在領域の時制形式によって表出されている例である。

(10) El alcalde comentó que ha habido mucha gente en las fiestas de San Isidro.

(11) El parte meteorológico añadía que las primeras ráfagas alcanzarán a la isla esta madrugada.

(12) Copérnico probó que la tierra gira alrededor del sol.

Carrasco Gutiérrezは、上記例文中の従属文事態はすべて発話時と主文事態の生起時の両方に方向づけられているという。彼女はこのように従属文事態の時間関係が主文事態の生起時と発話時の二つの時に関連づけられることこそが時制の一致の非標準的ケースの特徴だとし、そのような従属文事態が持つ特殊な時間解釈を「ダブルアクセス的解釈(interpretación de doble acceso)」と呼んだ。

ところで、Carrasco Gutiérrezによれば、この「ダブルアクセス」的解釈は必ずしもすべての従属文に可能というわけではなく、それを妨げる様々な要件があるという。まず、その第一は、次の例のように主動詞がpensar, creerといったいわゆる思考・想像的動詞(Carrasco Gutiérrezの用語ではverbos creadores del mundo)の場合である。

29) とはいえ、Carrasco Gutiérrezは、従属文事態が条件文の帰結節となっている場合にはcond.も文法的であり、また、imp.によって表出された従属文事態がestar+gerundioに置き換え可能な進行形の意味を示している場合には、imp.も文法的になると述べている。cf. pp.3086-3087.

30) Cf.pp.3087-3095.

(13) Copérnico pensaba que la tierra {*gira/giraba} alrededor del sol.

Carrasco Gutiérrezに従えば, *pensar*を主動詞とする(13)においてダブルアクセスの解釈が不可能なのは, *pensar*の属す思考・想像的動詞群が必ずしも現実世界とは一致しない可能世界(*mundos posibles*)に言及するからだという。すなわち, そのような可能世界について述べる動詞が主動詞になると, 話者の従属文事態の真偽に対する前提がブロックされ, その結果, 話者が属す現在領域の時制形式の出現も妨げられることになるというのである。

また, Carrasco Gutiérrezは, 以下のような分裂文も「ダブルアクセス」は難しいと述べている。

(14) ??Fuisteis vosotros mismos que nos dijisteis hace unas semanas que estáis hartos.(14)' Fue Juan el que nos dijo hace unas semanas que estáis hartos.

Carrasco Gutiérrezによれば, 従属文が主文主語についての断言(*afirmación*)になっているとき, そのダブルアクセスの解釈は難しくなるという。確かに, (14)と(14)'の文法性の違いはそれを明示していると思われるが, それでは, なぜそのような違いが生じるのか。残念ながらこの点に関するCarrasco Gutiérrezの言及はどこにもない³¹⁾。

さらに, 従属文事態の「ダブルアクセス」は, 以下のように, 主文事態についての情報量が多くなればなるほど難しくなる。

(15) Copérnico *gritó* que la tierra {??gira/giraba} alrededor del sol.(16) María dijo *[en voz muy baja]* que {??quiere/quería} a Juan.

(15)の主動詞 *gritó* (叫んだ)は単なる発話行為を示す *dijo* (言った)よりも当該行為の態様についてより多くの情報を持つ。また, (16)の主文事態も *en voz muy baja* (とても低い声で)という副詞句と共に起することにより, 当該事態が生起した際の状況がより鮮明となっている。このように主文事態が生起した際の情報量が多くなるにつれ「ダブルアクセス」が難しくなることについて, Carrasco Gutiérrezは, それは話者が従属文事態とその評価時として働いた過去時点との間の繋がりを強調しようとすることに起因する, と述べている³²⁾。

2.3. 第47章第3節：時制の相関と統語的従属³³⁾

さて, 前節では主に名詞的従属文に出現する動詞形式の時間解釈を基にスペイン語における時制の一致の概要が示されたが, 本節では新たに, 従属文に出現する動詞形式の時間

31) しかしながら, かつて分裂文における「ダブルアクセス」の困難さが指摘されることがなかったことを考えるならば, Carrasco Gutiérrezの指摘はそれだけで十分価値あるものと思われる。

32) Cf. p.3093.

33) Cf. pp.3097-3102.

解釈と非従属文に出現する動詞形式の時間解釈の違いが扱われている³⁴⁾。以下の例を参照されたい。

(17) El miércoles fuimos al cine y el martes anterior fuimos al teatro.

(18) Juan cantó y Pepa bailó.

Carrasco Gutiérrezによれば、上記のような等位文にいわゆる従属関係は存在しない。それにも拘わらず、等位文に出現する動詞間の時間解釈は一見従属文のそれと同じように見える。というのも、(17)の二つのfuimosの間には時間的前後関係が読み取れ、(18)のcantóとbailóの間には同時の関係が設定されそうに見えるからである。しかし、Carrasco Gutiérrezは、このような等位文中の事態間に観察される時間関係は言語外の知識によって決定されるものであり、先に見た名詞的従属文における主文事態と従属文事態の時間関係、すなわち、従属文事態の時間関係が主文事態のそれに依存しているというのとは別物だという³⁵⁾。

Carrasco Gutiérrezは、このような非従属文に出現する事態の時間関係と従属文のそれとの違いは、cond.の振る舞いの違いによって明らかだという。彼女によれば、以下のように、名詞的従属文に出現したcond.が示す発話時との時間関係は不定 (inespecificada) であり、それゆえ、同形式は発話時に対して前時・同時・後時関係を示すいずれの副詞句とも共起できるという³⁶⁾。

(19) Les dije ayer que habíamos llegado el día anterior y que nos marcharíamos {al cabo de una semana/hoy}.

一方、従属関係にない等位文に出現したcond.と発話時との時間関係は名詞的従属文に出現したそれとは異なる。以下を参照されたい。

(20) Habíamos llegado el día anterior, descansamos aquel día y nos marcharíamos al día siguiente/al cabo de una semana/*hoy.

(20)' Habíamos llegado el día anterior, descansamos aquel día y nos marchamos al día siguiente.

(21) Dije que habíamos llegado el día anterior, descansábamos aquel día y nos marcharíamos al día siguiente.

(21)' *Dije que habíamos llegado el día anterior, descansábamos aquel día y nos marchamos al día siguiente.

Carrasco Gutiérrezによれば、等位文(20)に出現したcond.は前文事態 (descansamos)

34) Cf. p.3097.

35) Cf. p.3098. 因みにCarrasco Gutiérrezは(17)(18)の等位文に出現する事態はどれも発話時基準だと述べている。

36) Cf. p.3099.

より後に起きる事態を示すが、その発話時との時間関係は不定ではなく常にそれより前 (anterioridad) となる、それゆえ、当該cond.は発話時を含むhoyと共に起ることができないのだという。また、(20)のcond.が(20)'が示すようにp.s.によって置き換えられるのも、p.s.が(20)のcond.と同様、発話時に対する前時性を示すからなのだという³⁷⁾。他方、(21)(21)'が示すように、名詞的従属文中のcond.に対してこのようなp.s.への置換を行うことはできない。Carrasco Gutiérrezはその理由として、p.s.に置換されれば、その評価時が主文事態の生起時から発話時へと変更されることになるからだ述べている³⁸⁾。

以上、等位文中に出現するcond.と名詞的従属文中に出現する同形式の発話時に対する時間関係のあり方の違いを見たが、Carrasco Gutiérrezはこれを以って、等位文中に出現するcond.は時制の一致の要請により出現したものではなく、発話時に対する前時関係の表示というその二次的時間的価値 (valor temporal secundario) から出現したものであると結論づけている。

2.4. 第47章第4節：時制の一致と文の順序³⁹⁾

本節は再び従属関係のある複文を対象にし、時制の一致と文の順序、すなわち、時制の一致と当該文中における主文、従属文の位置との関係を扱っている。まず、以下の例文を参照されたい。括弧は関係文を示す。

(22) La enorme grieta [que provocó el derrumbamiento de ayer] había sido denunciada por los vecinos tres días antes.

(23) Un chico [que llegó el jueves] había sido asaltado en el metro hacía dos días.

(22)(23)では、従属文である関係節に絶対時制であるp.s.が出現し、主文に相対時制であるplusc.が出現している。また、従属文の絶対時制は主文の相対時制に先行した位置に置かれている。このことから、一般的には、これらの複文で評価時となるのは先行した従属文中の絶対時制であると解釈されるのだが、Carrasco Gutiérrezはそれに異を唱え、「主文の動詞形式の時間関係は、それが絶対時制か相対時制かに拘わらず、従属文に方向づけられることはない。なぜなら時制の一致という現象に際し、文の順序 (el orden entre oraciones) が統語的依存関係に取って代わることはできないからである。」と述べている⁴⁰⁾。以下ではCarrasco Gutiérrezがこのように主張する論拠を見ていきたい。

Carrasco Gutiérrezは、まず、上記例文のp.s.をfut.に転換した例を持ち出す。

(24) # La enorme grieta [que, según el adivino Rappel, provocará un derrumbamiento el jueves] fue denunciada por los vecinos tres días antes.

(1b) Juan pensará el martes que María visitó El Prado el lunes.

37) Carrasco Gutiérrezはこのようにp.s.に置き換えることのできるcond.を特別にcond. retrospectivoと呼び、一般のcond.とは区別している。cf.p.3100.

38) しかし、(5)で見たように従属文にp.s.が出現すること自体は可能である。ただし、そのとき従属文事態は主文事態に対して前時関係を示すことになる。

39) Cf.pp.3102-3106.

40) Cf. p.3102.

ここで問題になるのは、(24)の *tres días antes* の解釈である。Carrasco Gutiérrezによれば、それは従属文事態 *provocará* の生起時 (*el jueves*) の3日前ではなく、発話時の3日前あるいは従属文以外の他の文が示す事態の3日前になるという。この解釈は (1b) のような *fut.* で表出された主文に従属した文に出現した *p.s.* の解釈とは明らかに異なる。先に見たように、同環境における従属文事態の時間関係は、主文の事態が生起する未来時基準となるからである。このことから、Carrasco Gutiérrezは、主文の時間関係が従属文の生起時に方向づけられることはない主張するのである。彼女によれば、この主張は次のような主文に *cond.* が出現する例によっても検証されるという。

(25) La enorme grieta [que provocó el derrumbamiento del jueves] dejaría sin hogar a muchas familias.

(25)' La enorme grieta [que provocó el derrumbamiento del jueves] dejaría sin hogar a muchas familias [al día siguiente/#dentro de una semana].

Carrasco Gutiérrezによれば、当該関係文の主文が *cond.* である (25) には2つの解釈が可能だという。そのひとつは (25)' に見られるいわゆる *cond. retrospectivo* の解釈である。この *cond. retrospectivo* は発話時より前の事態を示すので、*dentro de una semana* が示すような発話時と同時にまたはそれより後の時を示す副詞句とは共起できない。一方、同文の *cond.* のもうひとつの解釈は、以下の例文が示すように、当該 *cond.* が従属文以外の暗黙の評価時に方向づけられている場合である。

(26) Las autoridades advirtieron hace una semana de que la enorme grieta [provocó el derrumbamiento del jueves] dejaría sin hogar a muchas familias (dentro de unos meses).

Carrasco Gutiérrezは、(26)の *dejaría* が方向づけられるのは、その従属文である *p.s.* (*provocó*) の生起時ではなく、その主文にあたる *advirtieron* の生起時であり、同形式はまさにこの主文の生起時に対して後時性を示しているのだという。そして、この (26) の *dejaría* が (25)' のそれとは異なり、発話時以後を示す副詞句 (*dentro de unos meses*) と共起可能なのもそのことに因る、と主張するのである。

以上、関係文に *fut.* そしてその主文に *p.s.* が出現する例ならびに関係文に *p.s.* そしてその主文に *cond.* が出現する例を見た。Carrasco Gutiérrezはこれらの例文の従属文事態と主文事態の時間関係の解釈のあり方を基に、従属文事態の時間関係がその主文事態の生起時を基準時として決定されることはあっても、その逆、すなわち、主文事態の時間関係がその従属文事態の生起時を基準時として決定されることはない結論づけた。しかしながら、本稿の解説者は、それでは本節の発端となった (22) (23) はどのように解釈されるのかという素朴な疑問を持つ。なるほど、Carrasco Gutiérrezが引用した例文中の主文事態の時間解釈は彼女が主張するとおりだろう。しかし、彼女が最初に取り上げた (22) (23) の *plusc.* によって表出された主文事態の時間解釈はいったいどうなるのか。この点について Carrasco Gutiérrezの言及がないのは誠に残念である⁴¹⁾。

最後に、本節をまとめるにあたり Carrasco Gutiérrez は次のように述べている⁴²⁾。「時制の一致という現象は、多くの場合、発話時を基準として定められた事態の単なる配置の表現と一致する。しかし、2つの時制の間に一致があるかないかを確かめるための診断書として利用可能な次のような特徴的な表現もある。まず、従属文が fut. に従属しているとき、その時間解釈は発話時基準でなくなる。次に、従属文中の cond. は当該事態と発話時の時間関係を不定にする。さらに、主文の p.c. に対する前時・同時・後時関係の表示のために、従属文で過去領域の時制が使われる。」この記述から、Carrasco Gutiérrez によれば、① fut. によって表出された主文に従属した事態の時間解釈が発話時基準でない場合、② 従属文中の cond. の時間関係が発話時に対して不定の場合、③ p.c. によって表出された主文に従属した文に過去領域の時制が出現した場合、には時制の一致が起こっていると解釈されることが分かる。Carrasco Gutiérrez が時制の一致の有無を判断するためにあげたこれらの基準は、従来のそれとは大きく異なっていることから、彼女の立場を一層鮮明にするものとして特に注目すべきと思われる⁴³⁾。

2.5. 第47章第5節：非名詞的従属文⁴⁴⁾

本節では、時制の一致現象に関して名詞的従属文と非名詞的従属文に見られる重要な相違が指摘され、結果的に、「非名詞的従属文では時制の一致は義務的ではない (*la concordancia de tiempos no es obligatoria*)」と断じられている⁴⁵⁾。つまり、非名詞的従属の時間関係は主文時基準になることもあればそうでないこともあるというのである。以下、Carrasco Gutiérrez がこのような結論に至った過程を見ていきたい。

2.5.1. 関係文と原因文⁴⁶⁾

Carrasco Gutiérrez は名詞的従属文における時制の一致と非名詞的従属文におけるそれとの違いを扱うにあたり、非名詞的従属文の例として制限的關係文 (*oraciones de relativo especificativas*) と *porque* によって導かれた純粹原因文 (*oraciones causales puras introducidas por la conjunción porque*) を取り上げ、まず、これら二種類の非名詞的従属文の時間関係が主文時基準によって解釈される場合を検討している。

(27) El jueves hablaron con la chica que se había encargado hacía un mes/se encargaría

41) 本節における Carrasco Gutiérrez の主張によれば、*plusc.* によって表出された主文事態は、*p.s.* によって表出された従属文事態以外の暗黙の事態に対して前時の関係を示すということになるのであろう。しかし、それは本解説者がこの件について尋ねたスペイン語話者の解釈とは異なるものである。その解釈によれば、問題の *plusc.* は従属文事態に対して前時関係を示すものに他ならないからである。

42) Cf. p.3106.

43) 時制の一致の有無に関する従来の基準のうちもっとも典型的なのは、第2節で見たような、主文が過去領域の時制でその従属文も同じく過去領域の時制となっているとき、そこには時制の一致が起こっている、というものである。従って、Carrasco Gutiérrez のように、時制の一致の判断に fut. によって表出された主文に従属した文の時間関係を持ち出すのは極めて珍しいということになる。

44) Cf. pp.3106-3124.

45) Cf. p.3106.

46) Cf. pp.3106-3117.

- al día siguiente/se encargaba) de los certificados.
- (27)' Esa es la chica que {se encargó hace un mes/se encargará el mes que viene/se encarga } de los certificados.
- (28) Ayer María se marchó pronto porque {había dejado a los niños solos/estaba muy cansada}.
- (28)' Hoy María se ha marchado pronto porque {había dejado a los niños solos/estaba muy cansada}.

上記例文中、(27) (28) は主文がp.s.で、従属文中には過去領域の動詞形式が出現している。また、(27)' は主文がpres.で、その従属文には現在領域の動詞形式が出現している。さらに、(28)' ではp.c.によって表出された主文に、過去領域の動詞形式によって表出された文が従属している。従属文における動詞形式のこのような振る舞いから、関係文と原因文の従属文では時制の一致が起こっていると考えられるが、Carrasco Gutiérrezはとりわけ次の二点においてそれが証明されるという。

まず、(28)' に見られるようにp.c.によって表出された主文に従属した文中で過去領域の動詞形式が出現している点である。これは2.2.1.で見た時制の一致の標準的ケースにあてはまるもので、当該原因文の時間関係が主文時基準で解釈されることを明示したものである。さらに、もうひとつ関係文、原因文における時制の一致の存在を証拠づけているのは、(27)の関係文に出現したcond.の時間解釈である。2.3., 2.4.で見たように時制の一致が起こっている名詞的従属文中に出現したcond.は発話時との時間関係が不定になるという特徴を持つが、Carrasco Gutiérrezによれば(27)の関係文中に出現したcond.にもその特徴が観察されるというのである。次例を参照されたい。

- (29) El jueves hablamos con la chica que se encargaría {hoy/dentro de una semana} de los certificados.

(29) が示すように、関係文のcond.は名詞的従属文に出現したcond.と同じく、発話時に対して同時あるいは後時関係を示す副詞句と共に起ることができる。これは当該cond.が過去領域における後時性の表示という同形式の一次的価値を有したものであることを示すもので、Carrasco Gutiérrezはこのことから、この関係文中のcond.は時制の一致現象の現れだと結論づけている⁴⁷⁾。

以上、関係文、原因文が名詞的従属文と同じく主文時基準の時間解釈を受ける例を見てきた。しかし、Carrasco Gutiérrezによれば、これら非名詞的従属文の時間解釈には名詞的従属文とはまったく異なる振る舞いを見せるものもあるという。そこで、以下では、名詞的従属文と非名詞的従属文の時間解釈の相違が明らかになる例、すなわち、主文がfut.の場合を見てみる。

47) 2.4.で見たように、Carrasco Gutiérrezによれば、従属関係がなく、従って、時制の一致も起こらない文に出現するcond.は専ら発話時より前の事態を示すので、(29)のように発話時を含む副詞句、また、発話時以後を示す副詞句とは共に起できない。

- (1b) Juan pensará el martes que María visitó El Prado el lunes.
 (30) El concierto del sábado se suspenderá porque el día anterior todos los músicos {estarán/*estuvieron/*estaban} fuera del país.
 (31) Juan dejará una nota para el chico que irá a revisarle el gas.
 (32) El concierto del sábado se suspenderá porque ese día todos los músicos {estarán / #están} enfermos.

これまで何度も見たように、Carrasco Gutiérrezはfut.の主文に従属した文中に出現する動詞形式の時間解釈は主文時基準になると主張してきた。この主張に従うならば、(1b)の従属文中のp.s.は発話時以後の事態に言及することになる。それに対して、fut.によって表出された主文に従属した関係文、原因文中の動詞形式の時間解釈は(30)(31)(32)が示すように発話時基準となる。つまり、それらはたとえ主文時に対して前時的(30)・同時的(32)関係にある従属文事態であっても、発話時以後に生起する事態の表示である限り、すべてfut.で表出されることになるのである⁴⁸⁾。このことは、以下の従属文中のfut. perfectoの解釈の違いによっても確認される。

- (33) #Juan te asegurará este sábado que María habrá comprado las entradas dos días antes.
 (34) Juan venderá el viernes al doble de su precio las entradas que habrá comprado cinco días antes.

(33)の名詞的従属文中のfut. perfectoはfut.の主文に従属しているため、発話時以後に生起する主文事態よりさらに後に起きる暗黙の事態に対して前時関係にある事態を示すはずである。しかし、実際には、dos días antesという副詞句の存在により、当該従属文事態はその主文事態より前に生起した事態を示すと解釈されがちで、それが同文を受入れがたいものになっている、とCarrasco Gutiérrezはいう。一方、fut.の主文に従属した関係文中に出現したfut. perfectoにそのような問題は生じない。なぜなら、主文のfut.も、また、それに従属した関係文中のfut. perfectoも発話時基準であることから、fut. perfectoによって表出された従属文事態の生起時が主文事態のそれより前にあると解釈されるのはごく自然なこととなるからである⁴⁹⁾。

ここまでfut.の主文に従属した名詞的従属文と非名詞的従属文の時制の一致に関する振る舞いの違いを見た。その結果、同環境における非名詞的従属文事態の時間解釈は名詞的従属文事態のそれとは異なり発話時基準になる、ということが分かった。Carrasco Gutiérrezはこのことから「関係文と原因文の時間関係は主文の生起時にあまり依存しない」⁵⁰⁾、「名

48) 関係文の中にも次例のようにpres.が出現することもある。しかし、Carrasco Gutiérrezによれば、このpres.はいわゆる習慣の意味合いで使用されたものであるため、名詞的従属文中のpres.のように発話時以後に生起する主文と同時関係にあるわけではないという。El concursante estrechará unos minutos la mano de la modelo que se sienta a su lado durante la prueba. cf. p.3110.

49) Cf. pp.3111-3112.

50) Cf. p.3112.

詞的従属文以外の従属文では時制の一致は義務的ではない⁵¹⁾と主張するのだが、同様の結論は、以下で扱う非名詞的従属文の「評価時の間接的決定」という現象からも導き出されるという。

上で見たように、関係文、原因文といった非名詞的従属文に出現する動詞形式の時間関係は主文の生起時のほか、発話時を基準にして設定されることも可能である。Carrasco Gutiérrezはこのうち当該従属文の時間解釈が発話時基準になる場合を「評価時の間接的決定 (determinación indirecta del tiempo de evaluación)」と呼び、時制の一致とは区別した。Carrasco Gutiérrezによれば、この「評価時の間接的決定」は先に見たfut.に従属した非名詞的従属文以外にも確認されるという。以下、その例を見ていく。

- (35) El jueves hablaron con la chica que se había encargado de los certificados hacía un mes.
 (35)' El jueves hablaron con la chica que se encargó de los certificados hace un mes.
 (36) Juan conoció el lunes a la chica que se encargaría al día siguiente de los certificados.
 (36)' Juan conoció el lunes a la chica que se encargó al día siguiente de los certificados.
 (37) El jueves hablaron con la chica que se encargaba de los certificados.
 (37)' El jueves hablaron con la chica que se encargó de los certificados.

plusc.で表出された(35)の従属文事態の時間関係は主文事態の生起時に対して前時関係にあり、cond.で表出された(36)の従属文事態の時間関係は主文事態の生起時に対して後時関係、さらにimperfectoで表出された(37)の従属文事態の時間関係は主文事態の生起時に対して同時関係にある。以上のことから、(35)(36)(37)の従属文事態の時間解釈はどれも主文時基準であるといえる。一方、(35)'(36)'(37)'の従属文事態の時間関係を見ると、(35)(36)(37)の従属文中で示された主文時に対する前時・後時・同時関係が同じひとつの動詞形式、つまり、p.s.によって表出されているのが分かる。Carrasco Gutiérrezによれば、このp.s.は発話時基準の動詞形式であるから、(35)'(36)'(37)'の従属文事態の時間解釈はどれも発話時基準となり、結果的に(35)'(36)'(37)'はすべて「評価時の間接的決定」の例なのだという。なお、上の例に明らかのように、これら「評価時の間接的決定」の従属文事態の時間解釈は主文時基準のそれとは異なり事前に知ることはできず、その決定はあくまで言語外の知識によって行われることになる。以上の関係文に出現する動詞形式の振る舞いは、確かにCarrasco Gutiérrezのいう「名詞的従属文以外の従属文では時制の一致は義務的ではない」、「非名詞的従属文の時間解釈は主文時にあまり依存しない⁵²⁾」という

51) Cf. p.3106.

52) Cf. p.3117.

53) 上記の発話時基準と主文時基準の両方を認める関係文の時間解釈の説明にあたり、Carrasco Gutiérrezは「de re的解釈」と「de dicto的解釈」という二つの異なる概念を持ち出している。周知のように、「de re的解釈」とは話者の観点に基づく解釈であり、Carrasco Gutiérrezによれば“cómo son las cosas”に言及するものだという。他方、「de dicto的解釈」とは話者以外の人の観点からの解釈であり、Carrasco Gutiérrezによれば“no tiene que ver con cómo son las cosas sino con lo que se dice acerca de ellas”とある。このことから、Carrasco Gutiérrezは、その時間解釈が発話時基準になる従属文事態はde reの読みであり、主文時基準になる従属文事態はde dictoの読みだと述べている。cf. pp.3115-3117.

主張を裏付けるものといえよう⁵³⁾。

最後に、本項で扱った非名詞的従属文の「評価時の間接的決定」と先に見た名詞的従属文の「ダブルアクセス」の関係についてふれておきたい。上で見たように、非名詞的従属文の「評価時の間接的決定」とは当該従属文事態の時間関係が発話時基準になることを指す。一方、時制の一致の非標準的ケースで見た「ダブルアクセス」と呼ばれる現象も同じく発話時基準になる。従って、「評価時の間接的決定」と「ダブルアクセス」は一見同じもののように見えるのだが、Carrasco Gutiérrezによれば両者ははっきり異なるものだという⁵⁴⁾。

(38) Copérnico probó que la tierra gira alrededor del sol.

(39) Juan conoció el lunes a la chica que se encarga desde hoy de los certificados.

(40) Ayer lo hice fatal, porque hoy no hay nadie.

(38)は「ダブルアクセス」、(39)(40)は「評価時の間接的決定」の例である。Carrasco Gutiérrezは、(38)のような「ダブルアクセス」の従属文の時間関係は常に主文時と発話時の二つの時に方向づけられるという。すなわち、(38)の従属文事態giraは、主文事態probóの生起時と発話時の両方に対して同時関係を有しているのである。一方、「評価時の間接的決定」では、(39)(40)が示すように、従属文の時間関係が発話時だけに方向づけられるということが可能である。つまり、(39)の従属文事態se encargaは共起する副詞句desde hoyから分かるようにただ発話時との同時関係を示すだけであり、(40)の従属文事態no hay nadieも同様に専ら発話時との同時関係を示しているに過ぎないのである⁵⁵⁾。しかし、この「ダブルアクセス」と「評価時の間接的決定」の違いは必ずしも名詞的従属文と非名詞的従属文といった構文上の違いに対応しているわけではない。次に見るように、非名詞的従属文の中にも「ダブルアクセス」と解されるものがあるからである。

(41) Ayer lo hice fatal porque últimamente estoy muy nervioso.

Carrasco Gutiérrezは、(41)の従属文事態は純粋な原因文 (*una oración causal pura*) で、前件はこの従属文事態の結果と解釈されるが、このことから同事態は必然的に発話時と主文時の両方に関係づけられていることになるという。なぜならば、彼女によれば、「原因」は必ず「結果」に先んずるもので、もし(41)の従属文事態が発話時だけをその評価時とするならばまさにこの「結果」と「原因」の関係に逆転が生じてしまうことになるからなのである。以上のことから、Carrasco Gutiérrezは、(41)のような純粋な原因文は必ず主文時と発話時の両方を評価時にするため、それには「ダブルアクセス」という用語を適用することが可能だと述べている⁵⁶⁾。

54) Cf. pp.3114-3115.

55) Carrasco Gutiérrezによれば、(40)の従属文事態は発話時との同時関係しか示さないため、同文は前件にとっての純粋な原因 (*causa pura*) ではなく、むしろ、前件の発言を動機づけたもののよう解釈されるという。cf. p.3115.

2.5.2. 時の従属文

スペイン語における時制の一致を扱った第47章は*después, antes, cuando, mientras*と
いった時を示す接続詞によって導かれた従属文を扱う本節で幕をとじる。*Carrasco
Gutiérrez*によれば、この時の従属文はそれに対する主文の時間関係のあり方に応じて3種
類に分けられるという。以下ではその種類ごとに見ていくことにする。

まず最初は、主文事態が従属文事態に対して後時的関係を示す場合で、このとき従属文
は*después*という接続詞によって導かれる。この*después*によって導かれた従属文とその主
文との間に見られる時制の組み合わせは次のとおりである。「主文が現在領域の時制のと
き、従属文は接続法の*pres.*あるいは接続法の*p.c.*になる。また、主文が過去領域の時制ま
たは*p.c.*のとき、その従属文は接続法の*imp.*あるいは接続法の*plusc.*になる。」⁵⁷⁾ なお、
*Carrasco Gutiérrez*は、従属文中の動詞形式はどれもアスペクト的には*Perfectivo*かつ発話
時基準で、主文事態と従属文事態の前後関係は*después*によって決まるとしている。

次に主文事態が従属文事態に対して前時関係を示す場合だが、この時間関係は*antes*とい
う接続詞によって導かれた従属文とその主文の間で設定される。このとき主文と従属文の
時制の組み合わせは上述した後時関係の場合と同じで、「主文が現在領域の時制の場合、従
属文には接続法*pres.*または接続法*p.c.*が出現する。また、主文が過去領域の時制または*p.c.*
の場合、従属文には接続法*imp.*あるいは接続法*plusc.*が出現する。」⁵⁸⁾ しかし、*antes*によっ
て導かれた文が*p.c.*に従属している場合には、次例のように主文に接続法*pres.*、接続法*p.c.*
が出現することも可能である。

- (42) {*Han hablado*/**Hablaron*/**Habían hablado*} con Juan antes de que yo {*hable/haya
hablado*} con María.

また、*Carrasco Gutiérrez*によれば、*antes*に導かれた従属文中の単純形はアスペクト的
に*Perfectivo*であるが、複合形のアスペクトは*Perfecto*で、その時間的価値は対応する単純
形のそれと同じだという。さらに、従属文中の動詞形式は単純形、複合形に拘わらず、発
話時あるいはそれに代わる時間軸を基準にすると述べている。

最後は、主文事態と従属文事態が同時関係にある場合だが、この時間関係は*cuando*、
*mientras*によって導かれた従属文と主文の間に設定される。この際的主文と従属文の時制
の組み合わせは次のとおりである。「主文の時制が現在領域に属す場合、従属文には*pres.*が
出現する、ただし、接続詞が*cuando*で主文事態が後時性を示している場合には、接続法の
*pres.*が出現する。同様に、主文の時制が過去領域に属すもの、あるいは、*p.c.*の場合、従
属文には*imp.*が出現する、ただし、接続詞が*cuando*で主文事態が後時性を示す場合には、
接続法の*imp.*が出現する。また、主文の時制が過去領域あるいは*p.c.*の場合には、従属文に
p.c.、*p.s.*、*plusc.*が出現することもできるが、このとき主文と従属文には同じ時制が出現

56) *Carrasco Gutiérrez*のこの主張に従えば、(40)のように専ら発話時だけをその評価時とする原因文は純
粋な原因文ではないということになる。

57) Cf. pp.3117-3118.

58) Cf. p.3118.

していなければならない。』⁵⁹⁾ また、Carrasco Gutiérrezによれば「fut.またはcond.の主文に従属したmientras中に出現したpres.とimp.を除くすべての主文および従属文は、発話時あるいはそれに代わる時間軸を基準にする」⁶⁰⁾ という。

ところで、Carrasco Gutiérrezに従うならば、接続詞cuando, mientrasは意味的に主文事態と従属文事態が全体的あるいは部分的に同時であることを要求するため、主文動詞と従属文動詞の違いは単にアスペクトの違いになってしまう可能性があるという。実際、彼女のあげた例には、Perfectivo, Imperfectivo, Perfectoといった異なるアスペクトを付与された時制形式が出現しているが、なかでも注目すべきは次の例である。

(43) Ya se habrán ido cuando María cante sus canciones favoritas.

一般にfut. perfectoは特定の未来時あるいは特定の未来の事態より前に生起した未来の事態を示すとされるため⁶¹⁾、(43)の通常的时间解釈は主文事態が従属文事態に先行しているということになるが、Carrasco Gutiérrezの解釈はこれとはまったく異なっている。すなわち、彼女は、(43)の主文に出現したfut. perfectoは当該事態が生起した後の結果状態を表示するPerfectoアスペクトを持ち、cuandoに導かれた従属文事態は主文事態のこの結果状態に対して同時的關係を示している、と主張するのである。

このようにCarrasco Gutiérrezの解釈は、接続詞cuando, mientrasの要求する「同時性」という意味特徴をかなり重視したものなのだが、これらの接続詞によって導かれた従属文事態と主文事態の間には、次例に見るような非同時的な継起的時間解釈が可能な場合もある。

(44) Todos ayudaron a Juan cuando pintó su casa.

Carrasco Gutiérrezは、(44)には、Juanが家にペンキを塗るのをみんなが手伝ったという同時的解釈と、みんなの手伝いはJuanが家にペンキを塗った後に始まったという継起的な解釈のふたつが可能だという⁶²⁾。このうち特に主文事態と従属文事態の継起的解釈は上で見たCarrasco Gutiérrezの主張とは相容れないもののように思われるが、彼女によれば、それは主文事態と従属文事態のmodo de acciónに起因するものだという⁶³⁾。この説明に従えば、主文事態と従属文事態の間の継起的解釈は当該事態間の意味的問題に還元されるように見えるが、Carrasco Gutiérrezによれば、この継起的関係は、以下に見るように、plusc.によって表出された主文事態とp.s.によって表出された従属文事態の間においても成立する⁶⁴⁾。

59) Cf.pp.3119-3120.

60) Cf.p.3120.

61) Cf. Gili Gaya (1979:166), Porto Dapena (1989:57).

62) Carrasco Gutiérrezによれば、(44)の継起的解釈はTodos ayudaron a Juan cuando hubo pintado su casa.に置き換え可能だという。

63) ただし、Carrasco Gutiérrezによれば、このような継起的解釈が可能なのはcuandoだけで、mientrasの場合は不可能だという。cf. p.3122.

- (45) Habíamos aterrizado justo encima de la Torre Picasso cuando el ruido atronador del despertador me devolvió a la cruda realidad.

(45)の主文事態は従属文事態に先行すると解釈されるが、この点についてCarrasco Gutiérrezは「主文事態が従属文事態に先行しているように無理やり解釈させるようなcuandoの用法」と述べている⁶⁵⁾。また、彼女は「(45)のcuandoは談話の進行を促す新情報を導入する」⁶⁶⁾とも述べているのだが、この新情報の導入はcuandoの機能によるものではなく、cuandoに導かれた従属文中に出現したp.s.の機能によるものと解釈することも可能であろう。いずれにせよ解説者にとって、Carrasco Gutiérrezの(45)の主文事態と従属文事態の時間関係の解釈は、先に見た(43)のそれとの違いが際立ち、疑問を持つ。つまり、(43)(45)ともに、その主文には動詞複合形が、そしてその従属文には動詞単純形が出現していながら、主文事態と従属文事態の時間関係がそれぞれ異なって解釈されるというのは何か一貫性を欠くように思えるのである。

cuando, mientrasに導かれた従属文とその主文の時間関係についての説明は、以下に見る例文の解説を持って終わる。

- (46) a. Pedro dijo que el concursante de Burgos había conseguido su cuarto punto {cuando/mientras} su contrincante consiguió lo que para él era el tercero.
b. Pedro dijo que el concursante de Burgos consiguió su cuarto punto {cuando/mientras} su contrincante había conseguido lo que para él era el tercero.

Carrasco Gutiérrezは、(46a)(46b)の主文とcuando/mientrasに導かれた従属文の時制の組み合わせは先に指摘されたもの以外であるが、それは主文事態と従属文事態がそれぞれ異なる評価時に方向づけられているからだとい⁶⁷⁾、次のように説明している。(46a)では主文にplusc., 従属文にp.s.が出現しているが、Carrasco Gutiérrezの解釈によれば、これら二つの時制は当該事態を同時の関係に置くはずである⁶⁸⁾、しかし、もしそのような解釈が不可能だとすれば、それは主文がdijoの生起時を基準にし、従属文が発話時基準になっているから、というのである⁶⁹⁾。同様のことは(46b)の主事態と従属文事態にもあてはまるが、ここでは(46a)とは逆に、主文が発話時基準、従属文事態がdijoの生起時を基準にしていることになる。Carrasco Gutiérrezの以上の解釈をまとめるならば、cuando/mientrasに導かれた従属文およびその主文の時間関係は通常発話時基準で決定されるのだが、(46ab)のように当該従属文とその主文からなる複文自体がdijoのような過去領域に属す動詞に従属

64) ただし、(45)では(44)とは逆に主文事態が従属文事態に先行することになる。

65) 原文は“un uso de cuando que fuerza a entender el tiempo del evento principal como anterior al tiempo del evento subordinado.” cf. p.3122.

66) Cf. ibid.

67) Cf. p.3123.

68) Carrasco Gutiérrezによれば、時の従属文がmientrasに導かれていることから(46a)(46b)のplusc.はPerfectivoアスペクトを持つという。

69) Cf. ibid.

する場合はその限りではなく、主文事態、従属文事態が互いに異なる評価時基準を持つことが可能で、その結果、主文事態と従属文事態は同時関係以外の時間関係を持つに至る、ということである。

2.6. まとめ

以上、スペイン語の時制の一致現象に対する Carrasco Gutiérrez の見解の概略を見た。そのうちとりわけ Carrasco Gutiérrez の見方を特徴づけるものまとめるならば、次のようになると思われる。

- ① いわゆる時制の一致と呼ばれる現象は二つあるいはそれ以上の動詞間の時間解釈の依存関係をいうが、Carrasco Gutiérrez にとって、それは当該文の統語構造と密接に結びついたものである。すなわち、彼女にとって同現象は主文、従属文という従属関係のある複文において観察されるものに他ならないのである。従って、いくら時制の一致に見えるような場合でも、当該文に統語的従属関係が認められない限り、Carrasco Gutiérrez はそれを時制の一致と見なすことはない。
- ② Carrasco Gutiérrez によれば、時制の一致のあり方は従属文の統語的振る舞い、すなわち、それが名詞的従属文か否かによって、次のように大きく異なる⁷⁰⁾。
 - a. 当該従属文が名詞的従属文の場合、時制の一致は義務的であり、従属文事態の時間関係は必ず主文事態の生起時に方向づけられる。
 - b. 当該従属文が非名詞的従属文の場合、時制の一致は義務的ではなく、従属文事態の時間関係は主文事態の生起時以外の時すなわち、発話時を基準に評価することができる。
- ③ Carrasco Gutiérrez によれば、時制の一致に見られる主文事態と従属文事態の時間関係は当該文の統語的主従関係を反映したもので、従属文事態の時間解釈が主文時基準で評価されることはあっても、その逆、すなわち、主文事態の時間解釈が従属文時基準で評価されることはない。
- ④ 従来、時制の一致の判断基準は、主文が過去領域の時制形式によって表出された際の従属文事態の時間解釈がどうなるかであったが、Carrasco Gutiérrez にとってのそれは、主文が未来領域の時制形式の場合の従属文事態の時間解釈のあり方である。

3. いくつかの問題点

本節では、前節で見た Carrasco Gutiérrez の分析に対して、解説者が疑問に思う点をいくつか指摘してみたい。

3.1. 記述的問題

まず、Carrasco Gutiérrez が言及したスペイン語の時制の一致現象に対する記述的問題

70) 当該従属文が名詞的か否かということは、換言すれば、それが当該文の *argumento* であるか否か（すなわち、*adjunto*）ということである。

にふれておきたい。これまでスペイン語の時制の一致現象については、まとまった研究がなく資料も乏しいの実状であった。そのような中であって今回Carrasco Gutiérrezの執筆した第47章は質、量ともに極めて充実したもので、今後それがスペイン語の時制の一致を研究する者にとって必読の文献になるであろうことは疑いのないところである。しかし、ならば一層この論文の中で指摘された現象に見られる若干の記述的問題は正しておく必要があると思われる。以下、解説者の気づいた点を記す。

3.1.1. 過去領域の時制によって表出された主文に従属した名詞文中のimp.とp.s.

名詞的従属文中に出現したimp.は必ずしも主文に対する同時関係を示さない。次の例を参照されたい。

(47) Dijeron que María trabajaba en Correos hace dos años. (Carrasco Gutiérrez 1998:390)

(48) Creyeron que María trabajaba en Correos hacía dos años. (Ibid.)

2.2.1.3. で見たように、Carrasco Gutiérrezは過去領域の時制によって表出された主文事態に対して同時関係を示すのはimp.によって表出された従属文事態だけであると述べていたが、これはimp.によって表出された従属文事態がすべて主文事態に対して同時関係を示すことを意味するものではない。例えば、(47)のimp.によって表出された従属文事態は副詞句hace dos añosが示す過去領域とは同時関係にあるが、dijeronの示す主文事態とは前時関係にしかないし、(48)のimp.によって表出された従属文事態も副詞句hacía dos añosが示す過去領域とは同時関係にあっても、creyeronの示す主文事態とは前時関係しか持たないからである⁷¹⁾。

また、Carrasco Gutiérrezは、過去領域の時制によって表出された主文に従属した文中のp.s.は主文事態に対して前時関係を示す、と述べていたが、これもまた問題である。以下の例が示すように、同環境に出現したp.s.の中には主文事態と同時関係を示すものもあるからである。

(49) Vimos que Juan la esperó sentado en la escalera. (Ibid.:326)

Carrasco Gutiérrezによれば、(49)のように過去領域の時制によって表出された主文事態が知覚を意味する場合、その従属文中に出現するp.s.は主文事態に対して同時関係を示すという。このp.s.の同時的解釈はまさに主文に用いられた知覚動詞の語彙的要請によるものであるが、その観点からすれば、Carrasco Gutiérrezが2.2.1.3で述べた同形式の主文に対する前時的解釈も同様に非知覚動詞の語彙的要請と見ることができよう。そしてさらに、主文事態と従属文事態の時間関係が事前に予測できないという点で、このp.s.の用法は2.5.1. で見た関係文中のp.s.と類似すると思われる。

71) (47)(48)ともCarrasco Gutiérrezの博士論文中であげられた例なのだが、『スペイン語記述文法』の中でこれらに関する言及がないのは奇妙である。

3.1.2. fut.によって表出された主文に従属する名詞文の時間解釈

Carrasco Gutiérrezにとって、fut.によって表出された主文に従属した名詞的従属文の時間解釈はスペイン語の時制の一致の決め手である。なぜなら、彼女によれば、同環境で出現した従属文事態は専ら主文時基準になるからである。しかしながら、fut.の主文に従属した名詞的従属文の中にも次例のように、発話時と関係した事態が出現することは可能だと思われる。

(50) Copérnico probó que la tierra {giraba/gira} alrededor del sol. (Rojo 1976:88)

(51) María dirá que la tierra gira alrededor del sol. (解説者作成)

(50)(51)の従属文事態は“la tierra gira alrededor del sol”(地球は太陽のまわりを回る)といういわゆる真理文である。この真理文は(50)のように過去時制の主文に従属するとimp.とpres.の両方で表出可能で、前者で表出された場合には主文時基準、後者で表出された場合には主文時と発話時の二つの時を基準とする「ダブルアクセス」になる。

さて、この同じ真理文をfut.によって表出された主文に従属すると(51)のようになる。このとき当該従属文事態の評価時はどうなるのだろうか。(50)にならうならば、それはfut.によって表出された主文の生起時だけではなく、この主文時と発話時の両方ということになるだろう。つまり、fut.の主文に従属した名詞的従属文も過去時制の主文に従属した名詞的従属文と同じように「ダブルアクセス」が可能なのである。ところが、Carrasco Gutiérrezの論にはこの点に関する記述がない。その理由は定かではないが、少なくとも解説者には、この点は看過できないものに思われる。というのも、それは時間解釈に関して、fut.に従属した名詞的従属文もfut.以外の時制に従属した名詞的従属文と同様の振る舞いを見せることを明示するものだからである⁷²⁾。

3.1.3. p.c.によって表出された主文に従属した名詞文中の動詞形式

Carrasco Gutiérrezによれば、p.c.によって表出された主文に従属した名詞的従属文中に過去領域の時制が出現したとき、それは時制の一致が起こっている証拠である、ということであったが、この記述には問題があるように思われる。Rojo (1976:79) や寺崎 (1998:224) によれば、同環境の従属文は過去領域の時制が主文になる場合とは異なり、「(現在領域と過去領域の時制の)二重の選択(doble opción)」が可能であったり、「伝達動詞が現在完了の場合、時制の照応が起きないのが普通である。」とあるからである。すなわち、これらの研究者の観察に従うならば、p.c.の主文に従属した名詞的従属文では過去領域の時制によって表出された主文に従属した名詞的従属文の場合ほど規則的に時制の一致は起こらないのである。このようなp.c.が主文となった場合の時制の一致の特徴は、おそらく先述した研究者が述べるように、現在領域と過去領域の両方に関わるというp.c.の特殊な時制的特性に基づくものであろう。しかし、今ここで指摘したいのは、それよりむしろ、前述のよ

72) このようにfut.に従属した名詞的従属文とfut.以外の時制に従属した当該文の共通性が見過ごされてしまうのは、おそらく未来領域の動詞パラダイムが貧しいためであろう。fut.に従属した名詞的従属文にも過去時制に従属した当該文に見られるimp.とpres.の違いのようなものが確認されていれば、事情はもっと異なっていたはずである。

うな一種異質な振る舞いを示すp.c.に従属した文の時制解釈を、時制の一致の有無の判断基準にしようとするCarrasco Gutiérrezの見解の是非である。

3.1.4. despuésによって導かれる従属文中の動詞形式

記述的問題の最後はdespuésによって導かれる従属文中の動詞形式についてである。Carrasco Gutiérrezによれば、主文が過去領域の時制のとき同環境において出現するのは接続法imp.あるいは接続法plusc.ということであったが、実際には以下の例のように、直説法p.s., また、直説法plusc.が出現することも可能である。

(52) Les vimos después de que llegaron con sus familias. (diccionario de Salamanca 1996:526)

(53) Salí inmediatamente después de que había amanecido. (Porto Dapena 1989:106)

ただし、解説者の見る限り、despuésの従属文中には上のように直説法p.s., plusc.が出現することはあっても、直説法imp.が出現することはないようである⁷³⁾。

3.2. 解釈上の問題：統語的解釈 vs. 非統語的解釈

ここではCarrasco Gutiérrezの時制の一致の解釈上の問題点について取り上げる。前節で明らかになったように、Carrasco Gutiérrezの時制の一致という現象に対する見解は基本的に当該文の統語構造に基づいたものである。すなわち、Carrasco Gutiérrezにとって、時制の一致は統語的従属関係のある文においてのみ認められる現象であり、その時間解釈も当該の統語的主従関係に従ったものになる、というのである。しかし、このようなCarrasco Gutiérrezの見解がスペイン語の時制の一致に対する解釈のすべてではなく、同現象に対しては非統語的観点に基づく解釈も存在する。そこで本項ではCarrasco Gutiérrezの解釈の妥当性を検証する意味からも、この統語的解釈と対立するRojo (1976) の機能的解釈を取り上げ、これとCarrasco Gutiérrezの解釈の簡単な比較対照を行う。

3.2.1. Rojo (1976)

Rojo (1976) のスペイン語の時制の一致に対する立場は、「時制の一致は「時性⁷⁴⁾」の対応 (correspondencia de temporalidad)」と呼ばれるより一般的な現象の特別なケースである。すなわち、それは従属文事態が主文事態の観点から眺められるという従属構造において認められる時性の対応現象なのである⁷⁵⁾ という記述にまとめられるだろう。すなわち、Rojoにとって、時制の一致という現象は当該文の統語的主従関係によって規定されるものではなく、二つあるいはそれ以上の事態間に設けられる相対的時性 (cronología relativa) に基づくものなのである⁷⁶⁾。このようなRojoの解釈は、彼が時制の一致を従属文だけでな

73) Porto Dapena (1989:106) によれば (53) のplusc.はhubo amanecidoの代用だという。

74) Rojo (1976) の “correspondencia de temporalidad” “cronología relativa” はそれぞれ「時性の対応」「相対的時性」と訳す。

75) Cf. Rojo (1976), p.72.

76) Cf. ibid., p.82.

く等位文にも認めていることに明らかである。

(54) Lo vi; había salido del café. (Rojo 1976:70)

(54)' *Lo vi; ha salido del café. (Ibid.:71)

Rojoによれば、等位文 (54) (54)' に見られる文法性の違いは、従属文において観察される時制の一致と同様に、発話時基準の時間関係と非発話時基準の時間関係は異なる形式によって表出されることを示したものだという。つまり、上記二例は、等位文においても、従属文の場合と同じく、発話時より前に生起した事態 (ver) に対して前時的関係にある事態を表出する場合には *plusc.* が用いられ、発話時基準の *p.c.* が使われることはないことを明示しており、このことから Rojo は、時制の一致という現象の適用範囲は従属関係のある複文だけでなく相対的時間関係が設定できるすべての事態間にまで広げるべきだと主張するのである。

Rojo (1976) については、Carrasco Gutiérrez の時制の一致の解釈との関連において、もうひとつ指摘しておきたい点がある。それは彼が、従属文事態の時間関係が主文時基準になるかどうかには様々な要因が関係する⁷⁷⁾、としている点である。すなわち、Rojo は、従属文事態の時間関係は常に主文時基準あるいは発話時基準になる可能性があるとして述べた上で、例えば、主文と従属文の主語の同一性は従属文事態の主文時基準という解釈を誘発するだろうし、また、従属文事態と発話時との関係が重要な場合には、当該従属文事態は発話時基準で解釈されることになるだろう、と述べているのである。このことは、換言すれば、「従属動詞が常に主動詞を通して評価されるというのは誤り」⁷⁸⁾ ということでもある。実際、Rojo のこの見方は、Carrasco Gutiérrez が「ダブルアクセス」(すなわち、発話時と主文時の両方に方向づけられる) とした次の従属文事態の時間解釈に明らかである。

(11) El parte meteorológico añadía que las primeras ráfagas alcanzarán a la isla esta madrugada.

Rojo は (11) の *fut.* で表出された従属文事態 (*alcanzarán*) は発話時基準であり、主文時に方向づけられることはないと言い切る。そして、その証拠として、「もし当該文が(発話時より前だが、*añadía* より後の)すでに過ぎ去った早朝に言及するものならば、*alcanzarán* という *fut.* は使われず、*alcanzarían* という *cond.* の使用が義務的になる」ことをあげるのである⁷⁹⁾。

3.2.2. 名詞的従属文とその主文の時間解釈

本項では、時制の一致という現象をめぐる Carrasco Gutiérrez の統語的解釈と Rojo の非統語的解釈の比較対照を、Carrasco Gutiérrez の分析で問題になった事象を基に行っていく。

77) Cf. *ibid.*

78) Cf. *ibid.*

79) Cf. Rojo (1976), p.81.

3.2.2.1. 過去領域の時制によって表出された主文に従属した名詞文中のimp.とp.s.

まず、過去領域の時制を持つ主文に従属した名詞的従属文中のimp.が主文事態に対して前時関係を示している場合から見ていこう。以下がその例であった。

(47) Dijeron que María trabajaba en Correos hace dos años. (Carrasco Gutiérrez 1998:390)

(48) Creyeron que María trabajaba en Correos hacía dos años. (Ibid.)

Carrasco Gutiérrezはこれらの例を記述していなかったが、仮にその記述があったとしても、その説明は難しいものになっていただろう。なぜならCarrasco Gutiérrezにとって、Imperfectivoというアスペクトを持つimp.に、Perfectivoアスペクトを持つ動詞形式に特有の前時性という機能を結びつけるのは非常に困難と思われるからである⁸⁰⁾。

一方、当該動詞形式の相対的時性に注目するRojoの解釈に従うならば、この前時性を示すimp.は次のように説明されることになろう。Rojoにとって、imp.の基本的機能は発話時より前の時点あるいは事態と同時関係にある事態を示すことにあり、その意味では(47)(48)のimp.もその例外ではない。というのも、それらはそれぞれ副詞句hace dos años, hacía dos añosの示す時間領域と同時関係にある事態を示していると解釈されるからである。このような見方に従うならば、当該imp.が主文事態に対して前時関係を示すのは、単にそれらが示す同時性の基準となる時点が主文事態の生起時に先行しているからに過ぎない、ということになる。

次に、過去領域の時制の主文に従属した名詞的従属文に主文時と同時関係を示すp.s.が出現した場合を見てみよう。

(49) Vimos que Juan la esperó sentado en la escalera. (Ibid.:326)

Carrasco Gutiérrezは、(49)の従属文中のp.s.が主文事態に対して同時関係を示すのは主文が知覚動詞であることに起因するとしている。一方、Rojoには、このような主文事態と同時関係を示すp.s.についての特別な記述はない。このCarrasco GutiérrezとRojoの扱いの違いは、それぞれの関心の違いに基づいたものと考えられる。つまり、Carrasco Gutiérrezは、過去領域の時制に導かれた従属文中に出現するp.s.は通常主文事態に対して前時関係を示すと考えているため、(49)のように主文事態に対して同時関係を示す事例に対して特別な関心を抱いたのに対し、Rojoにはそのような前提そのものがないのである。むしろRojoは、主文事態と従属文事態の時間関係というより、以下のような従属文中におけるp.s.の出現の可能性そのものに強い関心を示している。

80) Carrasco Gutiérrez (1998:391) では、(47)(48)のように過去の主文事態に対して前時関係を示すimp.はImperfectivoアスペクトを持つplusc.と解釈されている。つまり、発話時より前の事態を示す動詞形式にPerfectivoのp.s.とImperfectivoのimp.の2種類があるように、発話時より前の時点よりさらに前の事態を示す動詞形式にもPerfectivoのplusc.とImperfectivoのimp.の二つを設定しているわけである。このことはCarrasco Gutiérrezがimp.という同一形式に異なる二つの時制機能を付与することを示すものである。

(50) El portavoz afirmó que la reunión se celebró con normalidad. (Rojo 1976:77)

(51) *creía/creí que hizo bien (Ibid.:76)

Rojoによれば、従属文にp.s.が出現するか否かは、どのような動詞が主動詞となっているかに因る。すなわち、主動詞が(50)のように叙実性の高いafirmarの場合には、従属文にp.s.が出現しその時間関係は発話時基準で評価されるが、(51)のように主動詞が叙実性の低いcreerの場合には、従属文にp.s.が出現するのは非常に困難で、その時間関係も主文時基準で決まることになる、というのである。このような叙実性の低い動詞が主文に出現する際の従属動詞の制約についてはCarrasco Gutiérrezも「ダブルアクセス」との関連で扱っていたが、彼女の指摘はcreerのような動詞が主文となると、その従属文には現在領域の時制形式は出現できないということだけで、(51)のようにp.s.も制約を受けるということには何もふれていなかった。彼女がなぜp.s.の制約を指摘しなかったのかその理由は不明だが、いずれにせよ過去時制のcreerに導かれた従属文にimp.は出現できてもp.s.が出現できないという事実は、Carrasco Gutiérrezにとっては説明のしにくい現象ではあろう。というのも、imp.もp.s.も時制的には同じ機能を持つと主張する彼女の立場からすれば、当該現象に見られるimp.とp.s.の振る舞いの違いも両形式の間にあるアスペクトの違いと見なさざるをえないのだが、肝心のアスペクトと当該現象の間に何らかの相関関係があるとは今のところ何ともいえないからである。一方、Rojoにとっての当該現象は、彼が主張するimp.とp.s.の時制的機能の違いを示す好例になると思われる。なぜなら、彼の見方に従えば、creerが主動詞のときその従属文にp.s.が出現できないのは、それが他の発話時基準の時制形式と同様にいわゆる「思考・想像」の動詞群とは適合性がないものだからであり、他方、imp.が同環境で何の制約もなしに出現できるのは、それがp.s.とは異なり非発話時（発話時より前にある時点）を基準とする時制形式で「思考・想像」に言及する動詞群とも親和性があるからだ、と説明されることになるからである⁸¹⁾。

3.2.2.2. fut.によって表出された主文に従属する名詞文の時間解釈

次に、fut.によって表出された主文に導かれた従属文中の時間解釈の説明を見る。

(1) a. María visitó El Prado el lunes.

b. Juan pensará el martes que María visitó El Prado el lunes.

Carrasco Gutiérrezによれば、(1b)のp.s.によって表出された従属文事態が発話時より以後に定位されるのは、当該従属文がfut.によって表出された主文に従属していることに因る。この説明はCarrasco Gutiérrezが依拠する時制の一致の統語的解釈の妥当性を明示したものと考えられる。一方、時制の一致を非統語的な観点から捉えようとするRojoにとって、(1b)のような例の時間解釈は問題となるはずである。彼の見方に従えば、p.s.は常に発話時より前に生起した事態を示す時制形式なのに、fut.によって表出された主文に従属した文中に出現するp.s.ではその解釈が認可されないからである。

81) この点についてはYamamura (2000) を参照されたい。

Rojo自身, fut.によって表出された主文に従属した文中の時間解釈の特異性には気づいており, 「fut., fut. perfectoによって表出された主文に従属した文中における時制形式のバリエーションの欠如は(…)重要で, 当該従属文中の形式は独立文の場合と同じになる, すなわち, 主文がpres.そして部分的ではあるがp.c.で表出された場合の従属文中の形式と同じということである。このようなことが起こるのは, 動詞体系の中でもっとも貧弱な軸である発話時より後を示す形式の数が少ないからである。」⁸²⁾と述べている。この記述によれば, Rojoはfut.に導かれた従属文中の時間解釈の特殊性を未来領域の事態を示す動詞形式の形態的貧困さに起因するものと考えていることになる⁸³⁾。

3.2.3. 非名詞的従属文とその主文の時間解釈

本項では, 非名詞的従属文とその主文の時間解釈について, Carrasco Gutiérrezの統語的解釈とRojoの非統語的解釈を比較してみる。

3.2.3.1. 非名詞的従属文とplusc.

まず, 主文にplusc.が出現した場合を見てみよう。

- (22) La enorme grieta [que provocó el derrumbamiento de ayer] había sido denunciada por los vecinos tres días antes.
 (23) Un chico [que llegó el jueves] había sido asaltado en el metro hacía dos días.
 (45) Habíamos aterrizado justo encima de la Torre Picasso cuando el ruido atronador del despertador me devolvió a la cruda realidad.

(22) (23) (45) はいずれも従属文にp.s., 主文にplusc.が出現した例である。このような例に対し, Carrasco Gutiérrezは2.4.で, 主文のplusc.はp.s.によって表出された従属文事態の生起時をその評価時にしているように見えるが, その解釈は誤りである, なぜなら「主文の動詞形式の時間関係は, それが絶対時制か相対時制かに拘わらず, 従属文に方向づけられることはない。」からだと言っていた。このCarrasco Gutiérrezの解釈は, 主文と従属文の間に設定される統語的主従関係をそのまま時間解釈という意味の分野に持ちこんだものであるが, 2.4.でも指摘したように, これでは当該主文がplusc.によって表出された根拠, 換言すれば, 当該主文事態が何をその評価時として表出されているのかが不明のまま終わってしまう可能性がある。

一方, 非統語的な解釈を取るRojoの当該plusc.の解釈は極めて簡潔である。すなわち, 彼はplusc.の機能を発話時より前の事態あるいは時点よりさらに前に定位された事態の表示と定めているので, 当該形式が出現した際には, その出現を保証するような時間的文脈さえ特定できればよく, それで当該形式の時間解釈は正当化されたことになるのである。この

82) Cf. Rojo (1976), p.79.

83) 3.1.2. で見たようにfut.によって表出された主文に導かれた従属文の中には, 次のような主文時と発話時の両方を評価時とするものもある。María dirá que la tierra gira alrededor del sol. (解説者作成) このような場合の従属文事態の時間解釈の説明には, Carrasco Gutiérrezの統語的解釈よりRojoの非統語的解釈の方がその一貫性, 簡潔性においてより有効だと思われる。

ことを上の例文中の *plusc.* にあてはめてみると、当該主文で *plusc.* が出現したのは、当該主文事態が *p.s.* によって表出された従属文事態に対して前時的関係にあるからだということになる。このような Rojo の解釈は、以下のような、形式上異なる二文の時間解釈の同一性をも簡単に説明することができる。

(52) *Ayer llegó un chico que estaba medio muerto de cansancio.* (解説者作成)

(53) *Un chico que llegó ayer estaba medio muerto de cansancio.* (同上)

(52)(53) はどちらも時間的に同じ言語外現実を表わしているが、その表出形式は互いに異なっている⁸⁴⁾。(52) は「昨日、ひとりの若者が到着した、そしてその若者は死ぬほど疲労していた」という事態を *p.s.* によって表出された主文と *imp.* によって表出された従属文の組み合わせによって表わしているのに対し、(53) は同じ事態を *imp.* によって表出された主文と *p.s.* によって表出された従属文の組み合わせによって表わしているからである。このように形式上異なる二文が同じ時間解釈を受けられることができるという事実は、Rojo によれば、次のように説明されることになる。(52)(53) が同じ時間解釈を受けるのは、どちらも *imp.* と *p.s.* の組み合わせからなる複文であることに因る。つまり、*p.s.* は発話時より前の事態を示し、*imp.* はもっともアクセスが簡単な発話時より前の時点あるいは事態と同時関係にある事態を示すと考えるならば、(52)(53) とも [ayer llegar un chico] という事態を発話時より前に生起した事態として表出し、[el chico estar medio muerto de cansancio] という事態をこの発話時より前に定位された事態と同時関係にあるものとして表出している点で共通しており、それが時間解釈の同一性に繋がったというのである。一方、Carrasco Gutiérrez の解釈による (52)(53) の時間解釈の同一性の説明は極めて困難になる。なぜなら主文と従属文の統語的主従関係をそのまま当該文の時間解釈に応用する Carrasco Gutiérrez の見方では、主文が *p.s.*、従属文が *imp.* で表出された (52) において従属文事態 [el chico estar medio muerto de cansancio] が主文事態 [ayer llegar un chico] に対して同時関係を示すことは説明できても、主文が *imp.*、従属文が *p.s.* で表出された (53) において、主文事態 [el chico estar medio muerto de cansancio] が従属文事態 [ayer llegar un chico] に対して同時関係を示すことを説明することは極めて難しいからである⁸⁵⁾。

3.2.3.2. 非名詞的従属文と *cond.*

最後に、Carrasco Gutiérrez の「主文の動詞形式の時間関係は、それが絶対時制か相対時制かに拘わらず、従属文に方向づけられることはない。」という主張の根拠となっていた主文に出現した *cond.* の時間解釈について見てみる。

Carrasco Gutiérrez によれば、(25) の主文に出現した *cond.* は決して従属文中の事態をその評価時とすることはなく、それゆえ、たとえ一見そのように見えても、主文の時間関係

84) この解釈は (52)(53) を完結した文と見なし、いかなる暗黙の文脈も想定されない場合のものである。

85) 主文の時間関係がその従属文の生起時に方向づけられることはないと考え Carrasco Gutiérrez にとって、(53) の主文の *imp.* はまず発話時基準で解釈されることになる。その結果、この *imp.* と *p.s.* によって表出された従属文事態の同時関係は Rojo の解釈のように自然に導き出されることはなく、それを保証するには何か暗黙の文脈のようなものが必要となってくる。

が従属文事態を基準にして測られることはない、ということであった。

- (25) La enorme grieta [que provocó el derrumbamiento del jueves] dejaría sin hogar a muchas familias.

これはRojoの非統語的解釈では説明しにくい現象である。彼の解釈によれば、cond.は発話時より前に置かれた時点あるいは事態よりも後に生起する事態を示す時制形式であり、(25)はそのcond.の機能が活かされても然るべき文脈にも拘わらず、実際にはその実現が妨げられているからである。従って、(25)のような非名詞的従属文の主文に出現するcond.はRojoの解釈にとっては誠に都合の悪い現象ということになる。しかし、それでは、このcond.の現象を以って、Carrasco Gutiérrezの主張の方がRojoのそれよりも妥当であるということになるのだろうか。この点について解説者は強い疑問を抱く。その理由は、次に見るように、cond.自体が一種特異な振る舞いをする動詞形式に思われるからである。

- (54) Me dijeron que José salía mañana para España. (解説者作成)

(54)' A: Oye, ¿cuándo sale José para España ?

B: Salía mañana, ¿no ? (同上)

- (55) Me dijeron que José saldría mañana para España. (同上)

(55)' A: Oye, ¿cuándo sale José para España ?

B: *Saldría mañana, ¿no ? (同上)

(54)の従属文中のimp.はp.s.によって表出された主文事態に対して同時的関係を示している。同様に、(55)の従属文中のcond.はp.s.によって表出された主文事態に対して後時的関係を示している。しかし、今注目すべきは、p.s.によって表出された主文事態が表層から消えいわゆる暗黙に了解された文脈 (contexto sobrentendido) になった場合のimp.とcond.の振る舞いの違いである。(54)'に明かなように、主文事態に対して同時関係を示すimp.は独立文として出現可能であるが、(55)'が示すように、主文事態に対して後時関係を示すcond.はそれが不可能なのである。確かに、cond.自体が独立文中に出現することはあるが、それは(56)のように発話時あるいはある過去時における状況・出来事の推測を示すもので、(55)'のようにある過去時に対する後時性を示すものではない⁸⁶⁾。

- (56) En aquel entonces estaría enfadado porque le hiciste esperar. (山田他1995:318)

以上のことから解説者は、従属文中に出現したcond.と独立文中に出現したcond.を、例えば、従属文中に出現したimp.と独立文中に出現したimp.のように、同じ一つの時制機能を持った形式として扱うことは難しいのではないかと考える。

86) 小説中の自由間接話法としてなら、ある過去時に対する後時性を示すcond.も単独で出現することは可能である。しかし、解説者のインフォーマント調査によれば、(55)'のような会話の中で当該機能を示すcond.が出現することは難しい。cf. 山田他 (1995), p. 318.

3.3. まとめ

本節では、Carrasco Gutiérrezのスペイン語の時制の一致に対する見解に対する問題点を、記述的観点および解釈上の観点からまとめた。記述上の問題点としては、Carrasco Gutiérrezの論考にはいくつかの重要な現象が洩れていたことがあげられるが、しかし、だからといってその記述の信憑性自体が減ずることはないと考える。これまで彼女ほど綿密にスペイン語の時制の一致を扱った研究はついぞなかったと思われるからである。他方、解釈上の問題点は、Carrasco Gutiérrezの統語的解釈をそれとは対極にあるRojoの機能的解釈と比較対照することにより明らかになったと思われる。それをまとめるならば、時制の一致という意味の領域と大きな関りを持つ現象を専ら主文と従属文の統語的主従関係によって説明するには限界がある、ということになろう。しかしながら、それでは時制の一致が非統語的解釈によってすべて説明できるかといえば、それにも様々な問題が生じるであろうことは想像に難くない。結局、従来ほとんど注目されることのなかったスペイン語の時制の一致という現象を完全に解明するには、これまで見過ごされてきた事象を一つ一つ記述し、それらを網羅的に説明することのできる統一原理をいろいろな観点から探っていくしかないのである。

4. おわりに

以上、『スペイン語記述文法』の第47章にあたるCarrasco Gutiérrezの執筆した“El tiempo verbal y la sintaxis oracional. La *consecutio temporum*”の概説とその問題点の指摘を行った。すでに何度も指摘したように、従来これほどスペイン語の時制の一致という現象を網羅的かつ綿密に記述し、その統一的解明を試みた研究はなかったといつてよい。従って、Carrasco Gutiérrezのこの論考は将来時制の一致を研究しようとする者すべてが必ず参考とすべき文献になることは疑いのないところである。しかしながら、このCarrasco Gutiérrezの論考も完璧ではなく、それには前節で指摘されたような記述上また解釈上の問題点がある。それゆえ、スペイン語における時制の一致の完全なる解明を志す者は、Carrasco Gutiérrezの見解に留まることなく、さらにその先を目指して研鑽を積んでいかなければならないのである。

参考文献

- Carrasco Gutiérrez, Ángeles(1994a): “La concordancia de tiempos en las gramáticas del español”, *Verba*, 21, pp.113-131.
- (1994b): “El principio de permanencia del punto de referencia”, en Carlos Martín Vide (ed.): *Actas del X Congreso de Lenguajes Naturales y Lenguajes Formales*, Barcelona, Promociones y Publicaciones Universitarias, pp.371-377.
- (1998): *La correlación de tiempos en español*, tesis doctoral, la Universidad Complutense de Madrid.
- Carrasco Gutiérrez, Ángeles y Luis García Fernández (1994): “Sequence of Tenses in Spanish”, *Working Papers in Linguistics*, Universidad de Venecia, 4, 1, pp.45-70.

- (1996): “Observaciones sobre la correlación de tiempos en español”, en Gerard Wotjak (ed.), *El verbo español*, Vervuert Verlag, pp.61-71.
- Gili Gaya, Samuel (1979): *Curso superior de sintaxis española*, Barcelona, Bibliograf.
- Porto Dapena, José Álvaro(1989): *Tiempos y formas no personales del verbo*, Madrid, Arco/Libros, S.A.
- Rojo, Guillermo (1974): “La temporalidad verbal en español”, *Verba*, 1, pp.68-149.
- (1976): “La correlación temporal”, *Verba*, 3, pp.65-89.
- Yamamura, Hiromi (2000): “Nuevo acercamiento a la concordancia de tiempos en español - Con especial referencia a la interpretación propuesta por Carrasco Gutiérrez (1998)”, *Lingüística Hispánica*, 23, pp109-131.
- 寺崎英樹 (1998) :『スペイン語文法の構造』東京, 大学書林.
- 山田善郎他 (1995) :『中級スペイン文法』東京, 白水社.
- 山村ひろみ (2002) :「『スペイン語記述文法』における動詞単純時制の取り扱いについて」『言語文化論究』No. 15, 九州大学大学院言語文化研究院, pp. 155-172.
- Diccionario de Salamanca de la lengua española*(1996), Santillana, Universidad de Salamanca.